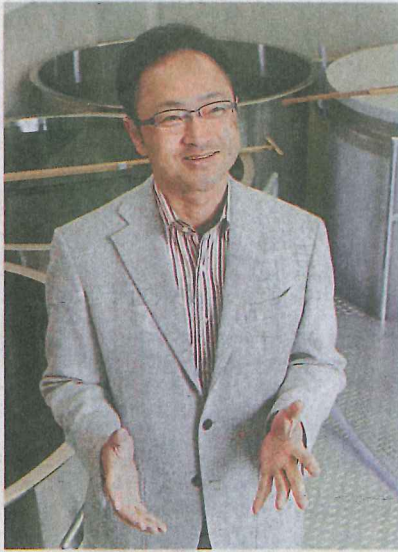


酒蔵を上川町に新設した上川大雪酒造の社長

つかはら としお
塚原 敏夫さん



ひと
2017

上川管内上川町にある上川大雪酒造の酒蔵「緑丘蔵」。9月の本格醸造開始に向けて、蔵の中に真新しい醸造タンクが並ぶ。18日には旭川東税務署から製造免許の移転許可が下りた。「社長として理想の酒造りを行い、全国の日本酒ファンの期待に応えたい」と意気込む。

上川町の観光庭園「大雪森のガーデン」のレストランも経営する。2015年に訪ねてきた旧友が、大雪山系を眺め「こんな場所で酒造りをしてみたかった」とつぶやいた。三重県内で酒造会社を営んでいたが、経営難で酒造りを休止したという。それなら三重から酒造免許を移して酒蔵を造り、上川の水質の良さを生かそうと持ちかけた。酒造りのノウハウはなかった。証券会社勤務時代に知り合った福島県の老舗酒造会社などを訪れ、経営に必要な原価や販路に関する情報を教えてもらった。よりに銀行から融資を受け、新しい酒蔵の建設につなげた。酒造りの中心となる杜氏は、金滴酒造(空知管内新十津川町)時代に全国新酒鑑評会で金賞受賞酒を造った川端慎治さん(47)に引き受けてもらった。「手仕込み、少量生産」を掲げ、川端さんも賛同。道産酒米100%の純米酒を造ると決めた。酒蔵に観光客を呼び込むことで、町おこしにつなげていくことも構想。酒蔵周辺に、おいしい野菜などの地元産品を販売する青空マルシェを開設する計画も練っている。札幌在住。小樽商大卒。49歳。(河田俊樹)

画家・大月源二の「走る男」

小樽育ちのプロレタリア画家大月源二の特別展を開催中の市立小樽美術館で20日、講演会「大月源二『走る男』の考察」が開かれた。講師の上野武治・北大名誉教授(73)は、自身が2014年に発表した、源二の代表作の油彩画「走る男」についての新解釈などを語った。

(徳留弥生)

北大・上野名誉教授 「親友への鎮魂」



市立小樽美術館で行われた講演会「大月源二『走る男』の考察」

大月源二
『走る男』
2017年
上野

同作品に描かれた若者は「源二自身」が定説だったが、上野氏は、源二の親友で小樽ゆかりのプロレタリア作家小林多喜二を描いたものなどの解釈を発表した。講演会には約70人が来場

した。上野氏は、作品の制作の経緯を説明したり、作中の人物と源二、多喜二の顔の特徴を比較したりして自説を説明。「力強く走る若者の姿に、多喜二への鎮魂が込められているのではないか」などと語った。小樽商大の夜間コースに通う市内の北田健二さん(70)は「源二の思いが分かったような奥深い内容でした」と話していた。

モデルは小林多喜二？

「函館線を地域資源に」

余市樽商大研究員が講演

【余市】後志管内の有志でつくる「JR函館本線の存続を求める住民の会（野呂栄会長）は20日、総会と講演会「地域の歴史文化を活かした観光まちづくり」を町中央公民館で開いた。講演で小樽商大の学術研究員高野宏康さんは「鉄道を大量輸送手段ではなく、地域資源として考える発想の

転換が必要」と述べた。

高野さんは散策路が整備された旧手宮線が、小樽の地域資源と位置づけられていると説明。「手宮線とは異なり生きた文化財である函館線を、観光面などで活用すべきだ」と話した。

さらに映画やCM撮影に多く使われる蘭島駅や駅舎内にギャラリーがある仁木

駅などの魅力を紹介。駅舎の活用などで地域資源化を訴えれば「鉄道を輸送手段とだけ考える社会認識を変化させられる」と話した。

総会と講演会は余市や蘭越など管内各地の約80人が参加。野呂会長ら役員を再任した。

（竹内博）

函館線の地域資源化をテーマに講演した小樽商大の高野宏康さん（右）

